# 松葉名所和歌集第十五

恵比毛世寸

会尓賀市　河内　藻塩

七七一〇　懐中花　桜匂へるなかにする名にかの市なる枝を取て社みれ

恵美片岡　駿河

七七二〇　名清長歌　をしなべてもするかなる名みのかた岡をかしともの

愛智川　近江　藻塩

七七三〇　名青　名ち川に若こすゝ梓の取もあへず下す筏のいちはやきよや

絵嶋　磯浦崎　淡路

七七四〇　堀百　あはち嶋名しまか磯にあさりする棚無小船いくへぬらん

七七五〇　岩集　千鳥鳴絵嶋の浦にすむ月を波にうつしてみる今宵かな

七七六〇　拾玉　旅ねする名しまか崎の磯枕浪に立そふ我涙かな

七七七〇　同　かきとめて物の哀をみるならは名嶋の浦の蜑の釣舟

七七八〇　詠藻　千鳥鳴名嶋か崎を絵にかは友よふ声や聞えさるへき

七七九〇　名青　朝まだき淡路の浦を漕行は絵嶋もみえすす霧こめにけり

七八〇〇　千五百　紅葉ゑにしかれあひてもみゆるかな絵嶋か磯のあけのそほ舟

七八一〇　正治色　そふる絵嶋の浦の月もまたうすたみ分る多霞かな

七八二〇　名青　降雪に名嶋の松も埋れてまたいろとゝぬ心ちこそすれ

七八三〇　同　桜咲絵嶋の里をむら〳〵にいろとる物は霞なりけり

七八四〇　月清　浪ぬくる名嶋に生る浜松の朽ぬなけきにぬらす袖哉

七八五〇　御集　あさりするたなしし小舟漕帰り名嶋か磯はあかすかも見ん

七八六〇　文木　あはち野や浦の霞やたつらん名しまの松も浅みとりなる

七八七〇　同　うつすとも筆もをよはし淡路なる名嶋か磯にかゝる白波

七八八〇　同　薄くゝいろとり渡る時雨かな名嶋かうへの木ゝの梢を

七八九〇　同　たつの嶋和歌の浦風更ぬらん絵嶋の浪に月渡るみゆ

七九〇〇　同　玉津嶋むかしの跡に風吹は絵嶋にかゝる和歌の浦波

## 穎娃郡　薩摩　初名三穎娃郡

七九一〇　名青　さつまかたなる名郡かうつほ嶋これやつくしのふしとふしらん

俊頼

## 氷室山　山城　類字

七九二〇　堀百　六月の空のけしきはかはらぬとあたり涼しき氷室山哉　俊頼

七九三〇　同　まだしらし氷消せぬひむろ山夏といふ物年にありとは　師頼

七九四〇　拾玉　皇の長閑き御代のひむろ山あたりまてこそ涼しかりけれ　西行

七九五〇　同　ともさそふ小野の山への氷室山此涼しさは夏かあらぬか　慈鎮

七九六〇　月清　外は夏あたりの水は秋にてうちは冬なる氷室山かな　同

七九七〇　愚草　氷室山まかせし水のさえぬれは夏せかる陰にそ有ける　俊成

七九八〇　同　いとひつる衣手かるし氷室山夕の後の木ゝのした風　仲正

七九九〇　玉吟　ひむろ山松風寒る夕暮は梢に雪のふしぬはかりそ　顕昭

八〇〇〇　同　氷室山いかに契て岩陰や夏の氷の渕となりけん　範光

八〇一〇　千五百　うち解ぬけしきにしるし氷室山夏をたつら心ありけり　顕昭

八〇二〇　岩集　夏の日の照すに氷るひむろ山こゝとはりなら ぬ身をや恨ん　仲正

八〇三〇　鷹百　氷室山麓の原の小鷹狩田面はるかにぬなかしそみる　後京極

八〇四〇　玉討　ひむろ山あたりの外やいかならん夕かけ涼し螢飛かふ　後鳥羽

八〇五〇　文木　冬ともし岩戸あけても氷室山夏ほとをさぬ関路せけり　詠人不知

八〇六〇　同　春も過夏たけぬれと氷室山冬もおさめてもける成けり　長方

八〇七〇　同　御狩せしみ雪にあへる氷室山とけぬ初を誰始めけん　為家

八〇八〇　同　せき入あたりの水はぬるけれと冬のまなる氷室山哉　雅経

八〇九〇　新六　さしも今日影にうつき氷室山岩垣紅葉散やしぬらん　慈鎮

八一〇〇　同　夏なれと寒氷たる氷室山まとひのなかのさとり成けり　忠度

俊成　同　為家　同　行家　光俊

## 一隔山　山城　或抄云隔山山城国宇治川ノ上ニアリト云々信濃ニ有同名

八一〇　万四　ひとへ山かさなる物も月夜よみ門に出たち妹かまつらん　大伴家持
八一二　万六　古郷は遠くもあらじすひとへ山越る我からに思ひそ我せし　高丘河内連
八一三　王　吟蟬の羽のうすき衣のひとへ山青葉涼しき風の色かな　家隆
八一四　七帖抄　一重山いくへ霞のへだつとも春の紅葉はかはらさりけり　為尹
八一五　千首　引わたす春の霞のひとへ山月やかなたに影匂ふらん

## 火野　同　藻塩并歌枕ニ当国

八一六　山家集　伏見過ぬるかのやに猶とまりてひのまて行て駒心みん　西行
八一七　詠付爰　にかくひのゝ杉村埋む雪小塩の山に色やまかへる　紫式部

## 日影山　山城　藻塩并歌枕ニ当国

八一八　堀百日かけ山生る蓑のうし若みいかなる神のしるし成覧　師頼
八一九　現六　そのかみの日影の山のもろは草今日はみあれの験にそかる　後鳥羽
八二〇　御集　日影山さしもかけこしもろかつ落葉もたにもよそに聞哉　忠基
八二一　夫木　日影山けふのかさしのもろ葉草かけて頼むと神は知らん

## 櫃河　橋岸　同　類字

八二二　六帖　年ふれと袖ひつ河のうつまきに恋しき人は影なかりけり　兼送
八二三　新六　ひつ河の岸に匂へるかは桜ちるこそ花のともめ也けれ　読人不知
八二四　夫木　日くれはるかの屋にそ伏見なれ明て渡しん櫃河の橋　為爰
八二五　同　明暮は心そかさる春日山ふもとにかよふひつ川の波
八二六　良玉　なをさりにふみとゝろかす音すれは明てたにみぬ櫃川の橋

## 東市　同　藻塩并勅撰名所集ニ当国

八二七　万三　ひんかしの市の植木の木足（コダル）まてあはぬ君ゆ我恋にけり　守倍
八二八　山家集　若葉さすひら野の松は更に又枝にや千世の数もそふ覧　西行
八二九　拾玉　末の代にたゝ我のみと思ふくまかゝ平野の神は知らん　慈鎮
八三〇　新六　千葉破平野の松の枝しけり千世も千代も色はかはらし　能宣
八三一　千五百　枝ことに千代もやちよも色かへぬ平野の松は君かまに〳〵　丹後
八三二　御集　月のすむ平野の松に吹風のちかきを宿のかひにすゝ哉　後鳥羽
八三三　題林抄　とゝ卯月きぬしし山くも平野の杜にゆふかつらせり　中将位
八三四　七帖抄　ぬきかくゝひらの宮のゆふすき草のかきはもこゝやめてきけ　清輔
八三五　夫木　神山のさかきのしゝしさしそへる平野の杜にもよは松風　平野神御歌ナン
八三六　同　しゝたるのみかとのおやのおほちこそ平野の神のひゝこ也けれ　門部王

## 広沢　池　山城　藻塩ニ葛野郡

八三七　家集　ひろ沢の池にうかへる白雲はそゝ吹風の波にさりける　重之
八三八　六百番　なかめやる心のはては広沢の池よりをもに出る月影　李経
八三九　同　すみきけり跡は光にほれとも月こそふりぬ広沢の池　定家
八四〇　同　くまもなく月すむ夜は広沢の池は空にそひとつなりける　経家
八四一　同　心こそ雲ぬはゝかにあくかれめなかめもさそふひろ沢の月　有家
八四二　同　眺やる心のすゑもとまれとや月に宿かす広沢の池　兼宗
八四三　同　月のすむ空はよそにもかはらしを眼にあまるひろ沢の池　隆信
八四四　同　さらしなも明石も爰にさそひさて月の光は広沢の池　信定
八四五　同　広沢の池さえ渡る月影は宮古までしく氷なりけり　顕昭
八四六　同　月清み割の空も雲消て松風はしふひろさはの池　教蓮

八四七　一〇　同　心には必ぬ昔こそうかひけれ月になかむる広沢の池
八四八　一〇　同　行きなくなかむる空も広沢の池の心にすめる月哉
八四九　一〇　山家集やとしもつ月の光のおぼさはいかにいへとも広沢の池
八五〇　一〇　拾玉宿もあれぬしもなけれと月のよそすみもかはらぬ広沢の池
八五一　一〇　同　広沢の池に氷はみもこけり何にか宿る冬の夜の月
八五二　一〇　同　ひろ沢の池の浪間に月来て音にかへる在明のそら
八五三　一〇　同　尋来てみるもかひある広沢の池こそ月の光なりけれ
八五四　一〇　御集ひろさはの池にやとれる月影やむかしをかへす鏡成らん
八五五　一〇　月清広沢の池におほくの年ふりて猶月のこる暁のそら
八五六　一〇　夫木ほそくふるやまひの雨や糸なしん水にあやもる広沢の池

## 引手山　大和　八雲御抄并袖珍抄ニ当国

八五七　一〇　万二ふすまちを引手の山に妹を置て山路を行はいけりともなし
八五八　一〇　明玉紅にふかくそみゆるふすまちのひき手の山の峯の紅葉ゝ
八五九　一〇　夫木梓弓ひきての山の郭公雲を宿とやをして入らん

## 一言神　同　類字

八六〇　一〇　続古君を祈るだに一言の神のみや二心なき程はしらん
八六一　一〇　夫木逢事をまるとや人も契るとて一ことぬしにねきそかけつる
八六二　一〇　同　つれなきを一言主に祈りみんとけぬつひさは思ひ知らん
八六三　一〇　同　御狩する君かへるとてくめ川にひとことぬしそいてませりける

## 広瀬河　神　同　類字　和名ニ広瀬郡

八六四　一〇　万七ひろせ川袖つくはかり浅き瀬に心ふかめて我は思はん
八六五　一〇　山家集広瀬河渡りの沖のみをつくし水かさそふし五月雨の比

女房　隆信
家隆　後鳥羽
西行　中務
慈鎮　同
同　同
同　同
人丸　加茂氏久
顕季　顕昭
後九条　法師師連
有穂　無名
西行　無名

八六六　一〇　千五百御祓して神の恵みもひろせ河幾千世までかすまんとすらむ　隆信
八六七　一〇　月清広瀬川袖つくはかり浅きこそ絶く結ふ契なりけれ　後鳥羽
八六八　一〇　名寄左せ河あさきは人の心にて袖行波はほすひまもなし　中務
八六九　一〇　現六手向する広瀬の神のかひあらはこひの泪の洗もあさなん

## 日晩野　同　類字

八七〇　一〇　ひくらし野行過ぬともかひもあらし紐とく妹も待しと思へは　家隆

## 氷室山　大和

八七一　一〇　玉吟大和路や都も遠きひむろ山また宵なからいはとあく也　家隆

## 檜原　山宮　同　類字

八七二　一〇　万七鳴神の音にのみ聞巻向のひはらの山をけふ見つるかな　人丸
八七三　一〇　名寄たれかせにつれなき程を巻向の檜原の山の色もかはらす　家隆
八七四　一〇　雲葉夜もすがら何も時雨の染つらん檜原の山の嶺の椎柴　覚性
八七五　一〇　玉吟よそに見し古き梢の跡もなし檜原の宮の秋の夕霧　家隆
八七六　一〇　万代巻向の檜原の嵐さえ〳〵て冴つかに雪降にけり　鎌倉
八七七　一〇　現六まきもくの檜原移原埋れて山の端みえぬ雪の空かな
八七八　一〇　玉吟巻向の檜原の山の杣人の春の衣とたつ霞かな
八七九　一〇　夫木鳴声もひはらの山に籠江の初瀬を出ぬほとときすかな　家隆
八八〇　一〇　同　もの之音もしはしとやめよ巻向の檜原の山に郭公なく　為相
八八一　一〇　同　まきもくの檜原の山の下紅葉まれなる色のもらまくもおし　実家
八八二　一〇　千首　秋を焼ひはらの山の紅葉之我もこかる之色をみせはや　経平
八八三　一〇　万七さひのくまひのくまり川の瀬を早み君か手とはまとんてふかも　為尹

## 檜隈河　同　類字

無名

八八〇四 同十二さひのくまひのくま河に馬とめて馬に水かへ我よそにみん　同

八八〇五 堀百今よりはひのくま河に駒とめしがしの雪のかげ移りけり　定家

八八〇六 愚草いかにせん檜隈川のほとときすたゞ一声の影もとまらす　同

八八〇七 同　駒とめしひのくま河の水清み夜渡る月の影のみそみる　隆信

八八〇八 王吟　駒とむる檜隈河の夕霧も恋しき人の影はへたてす

八八〇九 同　影やみぬひのくま川の夕霧に駒うち渡す音そとまらぬ

八九〇〇 千五百さゝのくま檜隈川につらゝねて駒もとめす冬の明ほの

八九〇一 同　まてしやはひのくま河に頼めをきし駒うちなつむ夕暮の空

八九〇二 名寄ひのくまの入野の宮の寒る日は川瀬氷て駒もわたしす

八九〇三 建保さゝのくま檜隈河にぬるゝ袖ほさてや人の面影を見ん

八九〇四 夫木あかねさすひのくま河をいそくとて影たにとめす駒そ過ぬる

八九〇五 同　今朝みれはひのくま川はうす氷小篠か原は霜置てけり

八九〇六 同　まてしは檜隈河の春の風もとぬ桜の陰をたに見ん

八九〇七 同　啼わたる声うつりせは時鳥ひのくま川に駒とめてまし

## 日根郡　和泉

八九八六 六帖　いつみなる日根の郡のひねもすに恋てそくらす君ほしらしん

八九九〇 物語　古郷の旅ねの夢にみえつるはうしろみやすらむとゝとはねは

## 平松　同　藻塩

九〇〇〇 家集　年も経てたけもかほらぬひら松のあやしやいかてぬもみてし哉

九〇〇一 名寄　ひら松はまた雲ふかく立にけり明行鐘はなにはわたりか

## 広田森　浜神　摂津　類字

九〇〇二 歌合　人はいさ我とはふまし神垣やひろ田の浜にふれる白雪　広田社

九〇〇三 同　もしなへて心広田の神ならはかゝる落身をめくまさらめや　同

九〇〇四 愚草　あはれみを広田の浜に祈ても今はかひなき身の思ひかな　匡房

九〇〇五 名寄　むかしより恵みひろ田の神ならはさりとも秋の心知らん　同

九〇〇六 同　広田よりあはもちもかけてみ渡せは絵嶋か磯にさはく白波　定家

九〇〇七 類聚　白浜のはまの砂にあらねとも恵み広田の名を頼む哉　同

## 姫嶋　摂津　仙覚抄三当国　或八豊後

九〇〇八 万二　妹か名は千代に流れんひめ嶋の小松かうれに苔むすまてに　家長

九〇〇九 続古見渡せは汐風寒し姫嶋や小松かうれにかゝるしら波　公継

九〇一〇 夫木　姫嶋の小松かうれにぬるたつは千年ふるとも年老すけり　光俊

## 比留川山　伊勢　名寄二当国

九〇一一 名寄　月はたゝひる川山に雲消て光もみちぬ塩合の浜　雅経

## 昼目神　同　名寄三十

九〇一二 名寄　いかはかりまきわさしてか天照やひるめの神をしはしとめん　俊成

## 日中　同　名寄歌枕篇

九〇一三 名寄　行代ぬいさはまむらに立まとん朝け過ては日なか成けり　順徳院

## 引馬野　参河　勅撰名所集井仙覚抄三当国

九〇一四 万一　ひくま野に匂ふ榛原入乱る衣にほせ旅のしるしに　滋春

九〇一五 堀百　ひくまの音か下なる思ひ草まに心なしとしらすや　寛蓮大徳

九〇一六 愚草　諸人心いろしあつさ弓ひくまの野への秋萩の花　兼盛

九〇一七 玉吟　引馬野に匂ふ萩原入乱れ鳴や小鹿の秋の白露　後鳥羽

九〇一八 千五百　姫小松ひくまの野へに子日して手毎に千世をかさしつる哉　広宣

九〇一九 夫木　ひくま野にやりしめさせる浅茅原雪の下にて朽そはてぬる　参河内侍

九〇二〇 愚草　あはれみを広田の浜に祈ても今はかひなき身の思ひかな　定家

九〇二一 堀百　むかしより恵みひろ田の神ならはさりとも秋の心知らん　同

九〇二二 同　広田よりあはもちもかけてみ渡せは絵嶋か磯にさはく白波　隆信

九〇二三 類聚　白浜のはまの砂にあらねとも恵み広田の名を頼む哉　同

## 姫嶋　摂津　仙覚抄三当国　或八豊後

九〇二四 万二　妹か名は千代に流れんひめ嶋の小松かうれに苔むすまてに　家長

九〇二五 続古見渡せは汐風寒し姫嶋や小松かうれにかゝるしら波　公継

九〇二六 夫木　姫嶋の小松かうれにぬるたつは千年ふるとも年老すけり　光俊

## 比留川山　伊勢　名寄二当国

九〇二七 名寄　月はたゝひる川山に雲消て光もみちぬ塩合の浜　雅経

## 昼目神　同　名寄三十

九〇二八 名寄　いかはかりまきわさしてか天照やひるめの神をしはしとめん　俊成

## 日中　同　名寄歌枕篇

九〇二九 名寄　行代ぬいさはまむらに立まとん朝け過ては日なか成けり　順徳院

## 引馬野　参河　勅撰名所集井仙覚抄三当国

九〇三〇 万一　ひくま野に匂ふ榛原入乱る衣にほせ旅のしるしに　長明

九〇三一 堀百　ひくまの音か下なる思ひ草まに心なしとしらすや　愚月

九〇三二 愚草　諸人心いろしあつさ弓ひくまの野への秋萩の花　奥好

九〇三三 玉吟　引馬野に匂ふ萩原入乱れ鳴や小鹿の秋の白露　仲実

九〇三四 千五百　姫小松ひくまの野へに子日して手毎に千世をかさしつる哉　定家

九〇三五 夫木　ひくま野にやりしめさせる浅茅原雪の下にて朽そはてぬる　家隆

九〇三六 堀百　いつみなる日根の郡のひねもすに恋てそくらす君ほしらしん　顕昭

九〇三七 物語　古郷の旅ねの夢にみえつるはうしろみやすらむとゝとはねは　清輔

九二〇　玉討集千世ふべき子日の小松袖かけてひくまの野べにけふは暮しつ　忠度

## 日向山　相模　藻塩

九二一　夫木さしてこしひなたの山を憑む身はめもあきらにとみえざらめやは　信実

## 常陸海　常陸

九二二　常春草若みひたちの海のいかゝ崎いかてあひみんたこの浦浪　光俊

九二三　夫木夜船こき沖にてきけは常陸海かまの崎に千鳥鳴なり　後嵯峨極

九二四　同　波かゝるかゝりやいつこひたち海のかしまか崎のあまの漁火　定家

## 斐太細江　同　藻塩并勅撰名所集三号国　飛騨郡

九二五　万十三白真弓ひたの細江の菅鳥の妹に恋れや寝宿かねつる　無名

## 比良山　湊浦山　高根都

九二六　万三我舟はひらの湊に漕はてん興へなゆきそさ夜更にけり　槐本

九二七　同　丸さ波の比良山風の海ふけは釣する蜑の袖へ入る見ゆ　人丸

九二八　同十一中〳〵に君に恋すはひらの浦のあまはしらましも玉藻刈つゝ　慈鎮

九二九　拾玉しかの浦や寒る気色のことなるはひらの高ねに雪や降らん　同

九三〇　同　ひらの山に雪けの雲はみゆれ共都の空は時雨のみして　同

九三一　同　色かはる比良の高ねの雲をみれは初雪降ぬまの萱原　同

九三二　同　ひらの山月の雲ねに宿はあれと心の谷の岩陰にのみ　同

九三三　同　法の水心にふかくせき入てむかしにかへす比良の山風　寂蓮

九三四　名青　桜さくひらの山風吹ぬるし花の波こすみ津の浜松　同信

九三五　堀百吹渡す比良のふゝきは寒くとも日つきの御狩せてやまんかは　覚性

九三六　百代晴のほる朝ぬる雲の下ことに初雪降てひらのたか山　信実

九三七　現六都まて寒さそみゆる横こしのひらの遠山雪降にけり　光俊

九三八　名青やとりする比良の都のかり庵に屋花みだれて秋風そ吹　後嵯峨極

九三九　月清比良山はあふゝみの海に近けれは波と花との見ゆる成へし　定家

九四〇　愚草雪とゝる比良の高ねの桜花なを吹かへせしかのうら風　家隆

九四一　玉吟たつかつへによきる浪やさこ波の比良山風のさそふ白雪　後鳥羽

九四二　御集冬さむみひらの高ねの月冴てさこ波氷るしかの唐崎　同

九四三　同　桜さく比良の高ねの春風は木の下のみの雪けせけり　同

九四四　同　ひらの山みねの桜は散ぬとん花に漕行しかの浦船　同

九四五　千五百さくら咲ひらの高ねに風ふけは梢につくしかの浦波　越前

九四六　夫木雨ふれ比良の高ねの雪けにも浪越まさる真野の古郷　為家

九四七　同　さやくらんもさこの霜はしらねともはるかにしろきひらの山のは　同

## 比叡　山寺　近江

九四八　堀後ひえの山その大嶽はかくるともなをみつのみはなかれてそふる　俊頼

九四九　拾玉世中に山てふ山はおほかれと山とはひえの御山をそいふ　慈鎮

九五〇　同　通ひなれてさこそはそと思へとも猶雪ふかしひえの山本　同

九五一　同　比叡の山いつより風のこほりけん都は今朝そ初雪の空　左大将

九五二　同　とにかくに身にしむ物は神垣やひえの山風みつの川なみ　慈鎮

九五三　同　ひえの山雪の窓うつ物や何見かす法もあらしせけり　同

九五四　同　ひえの山竪義や近く成ぬしむ夜はにさえたる問答の声　同

九五五　同　むかし聞三重の光に春霞たなひく末はひえの山本　同

九五六　夫木法の水浅く成行末の世をおもへはかなしひえの山寺　同

## 日吉　神宮　同　類字

九五七　拾玉我願む日吉の影は奥山の柴の戸までもさこさしめやは　慈鎮

九五八　同　しはしたに晴る心やなかしまし日吉の影の照まさりせは　同

九五九 一〇 同　我山とあふく高ねにをく霜をけたぬ日吉の影そ悲しき

九六〇 一〇 同　諸共にかもと日吉し琴草おなし明月の神のみあれに

九六一 一〇 拾玉　うれしくも仏の道と君か代とまもる日吉の影そくもらぬ

九六二 一〇 同　かはてより日吉の影もそひぬしんみゆきにくしき初雪の空

九六三 一〇 同　やはらくる日吉の影も神さびて千世しらぬ也嶺の松風

九六四 一〇 詠藻　なへて世を照す日吉の神なれは昔くも頼むせけり

九六五 一〇 同　君か代を日吉の神に祈をけは千年の数やしかの浦浪

九六六 一〇 名寄　やはらくる光さやかに照しみよ憑む日吉のなゝの神垣

九六七 一〇 同　天くだる神を日吉にあふきてと曇なかれと代を祈る哉

九六八 一〇 同　身のうさは日吉の山も雲やおほふ心のやみに猶迷ふらん

九六九 一〇 月清　頼へし日吉の影のあまぬくはやみもの末も照さしめや

九七〇 一〇 愚草　曇なき日吉の宮のゆふたすきかくる思ひのいつはるへき

九七一 一〇 玉吟　明ぬ夜の山の日吉の朝日影すすかにかくる雪の白ゆふ

九七二 一〇 同　君か代は千年の春に立かへり絶す日吉の神そ守らん

九七三 一〇 夫木　とにかくにいとそあふく日吉のや祈る心を神に任せて

九七四 一〇 同　北の嶺ふかき御法をあふくかな神は日吉の影をならへて

九七五 一〇 同　あまくだる日吉の神の験とやをひえの杉の木高かる覧

九七六 一〇 御集　千早振日吉の影も長閑にて浪おさまれる四方の海かな

九七七 一〇 新葉　をしなへて照さぬ方やなかるらんたのむ日吉の神のひかりは

九七八 一〇 同　いかにせん頼む日吉の神無月照さぬ影の袖の雫を

## 屏風浦　近江　蒲塩并方々集二当国

九七九 一〇 亨集　たてけるか屏風の浦の春霞に逢坂の関をこさしと

## 檜物里　同

九八〇 一〇 新六　あふみなるひもの里のかは桜花をは分て折くもなし　光俊 12オ

## 彦根山　近江

近江国ひこねといふ所に観音験所とて入くい
みしうまいりしに右大弁通俊にさそはれ
て参り侍りてかへりて弁のめのとにいひ
やりけるとゝ云

九八一 一〇 夫木　ひこね山あまぬきかとと聞しかとやへの雲ねにまとひぬる哉　経信

九八二 一〇 同　まを照すひこねの山の朝日には心も晴てしかそかへりし　右大弁乳母

## 日高杜　美濃　類字

九八三 一〇 風雅　世を照す日高の杜の宮木守しけき御影に今か逢てし　光俊

## 一重山　信濃　蒲塩

九八四 一〇 名寄　花は猫宮のみ成けり一重山やへにかさなる嶺のしら雲　中務卿

九八五 一〇 玉吟　花の色の衣かへうきひとへ山猫白雲はかたみなれとも　家隆

## 比乃祢河　上野　名寄手引

九八六 一〇 懐中　都より尋くるまの里人はひと祢川もや渡らさる覧

## 平鹿　出羽　蒲塩并類聚三当国　和名三平鹿郡

九八七 一〇 類聚　いてはなるひらかのみ鷹立帰り親のためには鷲もとる也　光俊

## 日美江　越中　蒲塩

九八八 一〇 長十　まつたんの浜行くしつなしとるひみの江過てたゝ
のしまとひたもとほりあし鴨のすたくふるえに

おとつひもきのふもありつもがくあしは　家持

日置里　丹波　類字　多紀郡

九一〇九　風雅　曇なき君が御代にはあかねさす日置の里もにきはひにけり

九一〇〇　名寄　あかねさす日をきの里を見渡せば卯花咲てなつかしき哉

平谷　同　藻塩

九一〇一　藻塩　あやめ引ひらの谷水花清みなかき千年の始なりけり

嬬河　出雲

九一〇二　夫木　つまこめて八重たつ雲に鳴神やひの川上の夕立の空

九一〇三　神道百首　やはらくる光は猶そあらはるひの河上にいつも八重かき

比礼振嶺　石見　類字

九一〇四　新後拾　石見潟高津の山に雲晴てひれふる嶺を出る月影

日晩山　同　類字

九一〇五　後撰　ひくらしの山路をくらみさ夜更て木の末毎に紅葉照せる

九一〇六　夫木　花盛昨日もけふも木の本に誰日くらしの山路なる覽

日笠浦　播磨　勅撰名所集并仙覺抄二当国

九一〇七　丁　七いなみ野は行過ぬらし天伝ひかさの浦に波立るゆゑ　匡房

九一〇八　堀百　あまつふ時雨に袖も沾にけりひかさの浦をさしてきつれと　正家

九一〇九　夫木　くるまにすき釣らし夕塩のひかさの浦に蜑の袖みゆ　匡房

〇〇一一　夫木　長閑なる春の日笠の浦波に鯛つるもふねけふも出らし　家持

比治奇奈田　播磨　ヒキイナタ同前歌　勅撰名所集六帰前ニ入

〇〇一一　丁十七　昨日こそ船出はせしかいさなとりひちきのなだをけふみつるかな　作者不審

〇〇一二　毒蛇寄事に胸のみさはくひきにはひきの難もさはさりけり

〇〇一三　家集　ありときくひきのなだと聞しかは恐しかすをそ行らむ　伊勢

〇〇一四　同　音にきく目にはまた見すはりまなるひきの灘と聞はまことお忠見

〇〇一五　同　年をへてひきの灘につむ冊波のすゑも待にそ有ける　同

〇〇一六　丁　代しまさふくひきの灘の舟路よりこまとゐも誰によりてそ　長方

〇〇一七　夫木　風をいたみひきの灘をとをる日も嶺の桜にあかやはする　後恵

〇〇一八　同　数なとぬ身をうき船はまなみひきの灘の波をこそまて　中務

〇〇一九　同　風はやきひきの灘の船よりもいきかたかりしほとはきこそや　謙徳公

〇〇一〇　同　「よそくもかるひきのなだゆへにきくは秋のたならぬかな　不知　14ウ

〇〇一一　同　かなしさはひきの灘にみちにけり都の人も聞おつるまて　恵慶法師

〇〇一二　題林　うら風に雲もさはきて鳴神のひきのなだを過る夕立　雅親中務卿親王

〇〇一三　丁　与浦人のうゑいさこのたゆむらんひきの灘の五月雨の比　雅親中務卿

比々の手　備前　長岡宰相海道記ニ備前ノ内ヒヽノトヲ云所ニ泊リシレヨリクレノトヲ云所ニマヽトニキテ

讃岐国へまかりてみの津と申津につきて月あか

くてひゝのてもかよはぬ程にとをくみえ渡りた

りけるに鳥のひゝの手につきて飛渡りけるも

〇〇一四　山家集　しき渡す月の氷をうたがひてひゝの手まはるあとの村鳥　西行

比佐志山　備中　夫木二十

〇〇一五　夫木　長閑なる春のひさしの山高み明とけき代の始をそしる　隆博　15オ

引嶋　備後　藻塩

為家　14オ　中務卿

○二一六 堀百ひく嶋の網のうけ縄波間よりあらてゐさすといふしてゐかく
○二一七 家集たつ浪の引嶋に住蜑たにもまたいとかに有ける物を

氷室池　周防　夫木三当国

○二一八 夫木 凍にしひむろの池も冬なからこも吹風に解やしぬ覧

人国山　紀伊　勅撰名所集并仙覚抄三当国

○二一九 万七 みれとあかぬ人くに山の木葉もそもの心になつかしく思
○二二〇 同　常ならぬ人国山の秋津野の柱若をし夢にみるかも

屏風嶽　同　名寄歌枕三当国

○二二一 家集 屏風にやぐもたてゝ思ひけん行音は帰り児はとまれる
石詞書云行者帰り児のとまりといふ所につゝ
きたるすくなり昔の山伏は屏風か嵩と申所を
たいらかに過ん事をかたく思ひてやうしや児
のとまりも思ひわつらふ成へしと云、

檜隈宮　同　類字

○二二三 風雅 名草山取て桙のつきもせす神わさしけきひの隈の宮

檜原嶺　同　藻塩

○二二三 家集 多さにやひはらの峯を越行はすゝく聞ゆる山鳩の声

引津　筑前　類字

○二二四 万七 梓弓引津のへなるなのりそか花つむまてはあはさ
しめやも名のりその花
○二二五 同十 梓弓引つのへなるなのりそか花咲までも逢ぬ吾かも

後頼
同

○二二六 新勅 梓弓ひきつのへなる名のりその誰うき物としら世初けん　読人不知

一夜河　筑後　八雲御抄

○二二七 現 六名に高き秋の半の一夜川ことはりしるくすめる月哉　顕氏
○二二八 拾玉一 よ河ありとこそきけ行末にくしすまてかへなる覧　慈鎮
○二二九 夫 木 頼ましな馴し名残の一夜河枕にさはく湊ありとも　後九条

無名
同

比礼振山　肥前　仙覚抄三当国

○二三〇 万五 松浦潟さよ姫の子かひれふりし山の名のみや聞つもしむ　憶良
○二三一 同　山の名をいひつけとかもさよ姫か此山のへにひれを振けん　後く
○二三二 家集 さ夜更て みつや行む松浦なるさよ姫かこるひれふるの山　家持
○二三三 夫 木 郭公まつらさよ姫たちなして比礼振山に声なおしみそ　後頼
○二三四 同　紅葉もる松浦の山は乙女子の錦にひれをふるかとそ見る　実家
○二三五 同　白妙のひれふる雪を嶺たかみ松浦の沖の遠つ船人　有家
○二三六 建保さよ姫のひれふる袖もやゝ涼し秋をまつしら山の下風　定衡
○二三七 同　松浦潟ひれふる山の子規あかてもこの声の遠さかり行　知家

西行

紀後文

比古山　高根　豊前　類字

○二三八 玉葉 いさきよきひこの高ねの池水にすまて心入すまきしめやは
○二三九 懐中 かくての久わひ思ひこの山ならは耳はいたつに成ぬへしも

菱池　同　夫木三当国

○二四〇 夫 木 豊国のひしの池なる菱のねをとるとや妹か袖沾にけん　読人不知

人丸

日向　日向　藻塩

無名

○二四一 詞花 あかねさす日にむかひても思ひ出ま都はほれぬ詠めすしんと

引野　壱岐　類字

○四一二　古今梓弓ひきのゝつら末つねに我思ふ人にことのしけゝん　貫之
○四一三　夫木心のみ引野の真弓末つねにおきふす袖も露の滋けん　読人不知
○四一四　同　ものゝふも哀と思へあつさ弓ひき野の夜ほの小男鹿の声　後光孝　後撰　太政大臣

比多我多磯　未勘

○四一五　万十四ひた潟の磯のわかめの立みたれわをかまつなもきそも今夜も　無名

火焼嶋　同

○四一六　名奇思ともかひなくて世を過すなるひたきの嶋の恋や波覧　好忠

干潟浦　同　類字

○四一七　玉葉くるまに鱸つるらし夕塩のひかたの浦に蜑の袖見ゆ　為家
○四一八　新千海原や沖漕くれは夕しほの干潟の浦にたつ波ゝ見ゆ　伏見院
○四一九　堀後夕つく日ひかたの浦のいりましに雲すはしてみのもすゝけす　後頼
○五一〇　夫木塩かれの干潟の浦のはなれ洲にたつそ鳴なる友まほふしし

左橋　同

○五一一　万十四ひろ橋を馬こしかねて心のみ妹かりやりてわはここにして　人見岡

人見岡　同

○五一二　物性語　年もふれてけるはよそにて帰りなん人見の岡のまつのつらさま　姫君

比古浦　同

○五一三　大鏡三中くに君に恋すはひこの浦の蜑となりましを玉もかりつゝ　桃園　山城

もとそのに住侍りける前斎院屏風に

○五一四　拾遺白妙の妹か衣に梅の花色も香をも分そかねつる　貫之
○五一五　金葉桃園のもの花こそ咲にけれ梅津のむめは散やしぬらん　西行
○五一六　山家集桃園の花にまかへるてりうそのむれたつ折は散心ちする

戻橋　同　藻塩

○五一七　懐中かきりなき人にあふ夜の暁に鳴ともは忍ねをなけ　和泉式部
○五一八　夫木いつくにもかへるさまのみわたれはや戻橋とは人のいふ覧

百重原　河内　夫木三当国

○五一九　夫木かたのなるもゝかはらをつかのまも恋すやあらん花の都を　鴨長明

求塚　摂津　藻塩

○五二〇　万九古の小竹田おのこの妻といしうなひ乙女の奥城（ヲキヤ）そこれ　市橋連
○五二一　同　芦の屋のうなひ乙女かおきつきを往来とみれはねのみしなかる　同
○五二二　同　つかの上の木の枝なひけりきくかとも沼男にしよるへけらしも　同
○五二三　堀　百もとめ塚おまへにかゝる柴船のきたけに成や寄かたはなみ　後頼

毛登目嶋　尾張　夫木テリ

○五二四　夫木白波のたちのみかくすわかめ草求嶋にや海士は程へし　読人不知

諸越原　里　相模　藻塩

○五二五　家集東路のもろこし里に織てたつきぬもやからの衣といはん　人丸
○五二六　堀　後名にしおはゝ虎や伏くん東路にありといふなる諸越の原　忠房
○五二七　夫木香なるなかこそうけれ夢ならて遠く見えける諸越の原　読人不知

○六一八 名寄まもろまんあなかましはしむは玉の夢路そ近き諸越の原　長明
○六一九 和歌手習 かちやまといろ〳〵にもる錦かなたてしこ咲タ諸越の原　百津嶋　同　同
○七一〇 万十四もゝ津嶋あしかしを舟あるきおほみめこそかるしめ心は思へと

諸葉山　常陸　同

○七一一 六帖 つゝしとてもろはの山にかくる英我山房になりと尋ん　法眼探春
○七一二 大木あふひ草 諸葉の山の時鳥なれてみあれの比や待しん　光俊

裳羽服津　同

○七一三 万九 鷲のすむ筑波の山のもほき津の其津の上にいさなびて　高橋連虫麻呂
百聞山　近江　藻塩
○七一四 懐中 いかこなるもゝきゝ山の谷水の濁しぬ音になかるなる哉

餅宮　同　同

○七一五 後集 あれこそはもちゐの宮と聞かしにつゝと思ふ事も社祈れ　俊重
○七一六 同 あれとみはさしてそれともまつらましよそにもちゐの宮仕へして　俊頼
諸神郷　同　類字
寛治元年堀川院の御時大嘗会悠紀方神
あそびの歌 諸神郷をよめる
○七一七 千載 古の神の御代より諸神の祈ろいはひは君か代のため　国房
もろ神の郷をよめる
○七一八 同 諸神の心に今そかなからし君をやもよと祈る真は　季経

守山　近江　類字

○七一九 後集 たかゝ為に氏の年へてもる山によをへて松の生そはろらん　忠見
○八一〇 同 くめの山守山に鳴よふこ鳥忍ひに誰をなくぬ城らん　中務
○八一一 堀 豆露のみと思ひけるおなもる山は紅葉こきおろす名に社有けれ　国信
○八一二 現六 風渡る嶺の木の間の夕時雨もる山陰も下葉染らん　信実
○八一三 慈草 夜もすから夢さへ目守山はうもぬ中も頼みやはする　定家
○八一四 夫木 あたら夜を誰に頼めて月影のもる山にかく呼子鳥哉　伊嗣
○八一五 同 鳴蟬の涙しられてもる山のしけみに落る木〻の夕露　為相
○八一六 同 君かためわか守山の青かしは万代までにもえまさる覧　読人不知
○八一七 建保だちねの親のいさめにもる山の下のなけきの色に恋めや　家隆
○八一八 同 しくれのみもる山陰の下葉かは物思ふ袖も色はかこすす　順徳院
○八一九 同 かきくらす泪しくれともる山は袖も残らす時雨しにけり　行意
○九〇 同 白露のもる山風のいかならん袖よりもろき嶺の紅葉〻　定衡
○九一一 同 我袖に時雨も露ももる山は下葉のほかも色かはりけり　兵衛内侍
○九一二 同 時雨もる山分衣袖しかと袖に秋なる色は見さりき　知家
○九一三 同 物思ふ名はかり色にもる山のしくれを下の松にさはしぬ　行家
○九一四 同 神無月我身時雨ともる山はわきて秋の色そくち行　康光
○九一五 夫木 青つゝしけきゝ目を守山の下に通はぬ道そくるしき　為顕
○九一六 新葉 憂名のみもる山陰の下紅葉ふりはてぬるか露も時雨も　妙光寺内大臣
○九一七 草庵 色〻の錦とも見んもる山の下葉は残せ露もしくれも　頓阿

喪山　美濃

○九一八 神道百首 みの国も山はきかし神の代のもりときけは泪おちつゝ　兼邦

望月牧　信濃　類字

○九一九 家集 もち月の駒引渡す影みれはおほつかなくて外なすそ有ける　伊勢

一〇〇　同　足引の山路遠くや出づらん日たかく見ゆる望月の駒
一〇一　堀百もち月のこまひき渡す秋の夜は光さやけきよにぞ有けれ　赤人
一〇二　同　相坂の関の多霧ふかければさやにも見えぬもち月の駒　顕昭
一〇三　同　あふ坂の関の杉間に引なるはこや望月のかけふちの駒　源順
一〇四　同　あふ坂に雲の梯なければ空をそかける望月の駒　元輔
一〇五　同　秋の夜のくまなき月に望月の駒は都へいりやしぬらん　重之
一〇六　同後　もち月のつきけの駒を相坂の杉間のかけに移してぞ見る　同
一〇七　拾玉　望月の御牧にあるこ春駒は秋のなかばや人にひかれん　基俊
一〇八　同　東路や秋の半にひく駒はみな望月の影にや有覧　有家
一〇九　詠藻　君が代にあふ坂山の関水も影しつかなる望月の駒　西行
一一〇　名寄　引渡る駒そ山はゆる望月のみ牧の原や恋しかる覧　同
一一一　愚草　かぞへしし秋のなかばを今夜そとゝやかにみする望月の駒　定家
一一二　同　関水の影もさやかにみゆるかな濁りなきよの望月のこま　同
一一三　五吟会　坂のもとのかたちの空にまてもひとつにみゆる望月の駒　後成
一一四　千五百都へはなと出やらぬ相坂の関に入ぬるもち月の駒　同
一一五　新六　名に高き木曽の梯引渡し雲ゐにみゆる望月の駒　肥後
一一六　夫木　相坂の神の手向に影をたに清水にとめよ望月の駒　後頼
一一七　同　あふ坂や山立出る望月の駒ふきをくる夜はの関風　慈鎮
一一八　御集　逢坂の山たち出て雲の上に影さしのぼる望月の駒　同
一一九　新葉　都へとゝくるきけは秋をへて雲ゐに待しもち月の駒　定家

物聞山　上野　藻塩

一二〇　夫木　いかほなる物きこ山の時鳥にこらぬことに聞ゆなる哉　業盛

物思山　陸奥　同

一二一　詠藻　恋草の物思山の時鳥なくこゑ聞ぬ人はなしとは　朝忠
一二二　六百番　年をへてしけるなげきをこりもせでなほ深かしぬ物思の山　匡房

最上河　出羽　類聚　最上郡

一二三　家集　もかみ山すかけせしより心有てまもりかへるやかたおの鷹　仲実
一二四　同　最上河いな船のみは通はすておりのぼり猫さはく芦鴨　永縁
一二五　同　もかみ川頼めし船のつれなくて漕はなれぬる行先もみん　肥後
一二六　同　最上河落まふ滝の白糸は山のまゆよりくりにぞ有ける　後頼
一二七　同　もかみ河滝の白糸くる人の心まちぬはあらしとぞ思ふ　慈鎮
一二八　堀百　もかみ川うきねはすれと水鳥の下の心はやすけくもなし　同
一二九　六百番　最上川人の心のいな舟もしはしはかりとゝかは頼まん　後成
一三〇　山家集　最上河つなて引ともいな船のしはしか程はいかりおろさん　同
一三一　同　つなく引網手とみせす最上河其いな舟のいかり納めて　同
一三二　詠藻　最上河瀬にせかるこ稲舟のしはしそとたに思はましかは　後成
一三三　名寄　もかみ河けこそよなしいな船のほれは下る岸の青柳　雅経
一三四　夫木　春はいま霞そ渡るもかみ河滝の水もとけやそむ覧　具氏
一三五　夫木　最上川早瀬に過るわれ舟のとゝまるへき此世とやみる　為家
一三六　新葉　もかみ河又いな船のくだる瀬もしはしはかりとゝめてとゝめん　師兼

諸寄河　但馬　藻塩

一三七　懐中　心してもろよせ川の水なしは渕もわかす思ひ渡覧

甕泊　備中　同

一三八　名寄　御調物はこふ千船も漕出よもたいの泊塩もかなひぬ　伊勢
一三九　夫木　ころ舟に多ふ人ありと聞つるは甕にとまるけにやある覧　高遠

百重山　紀伊　同

一四〇　夫木　三熊野やきもより越るもゝへ山おなし数なる浦の浜ゆふ　公朝

門司関　豊前　類字

一四一　六百　恋しともかくは人にもしられなん思ふ心やもしの関守
一四二　拾玉　思ふ事をかくそうれしきもしの関心ともむへき道なしねども
一四三　同　みな人の心つくしに和歌の浦をかきそとこむるもしの関守
一四四　家集　行過る心ほもしの関屋よりとめぬさへそやきみたりける
一四五　玉吟　玉章も部へ行はことつてんもしの関路を帰る雁かね
一四六　千五百　衣かく心つくしのことの葉や秋をとこむるもしの関守
一四七　夫木　もしの関おつる涙の玉章をかきあへぬまて部をと思ふ
一四八　同　まれにたに逢事かたき道なりとふてみせよもしの関守
一四九　新葉　きたえて通はぬ中を成にけり見し玉章のもしの関守

紅葉山　対馬　万葉巻十七　弐帯陸

一五〇　万十五　天雲のたゆたひくれは長月の紅葉の山もうつろひにけり
一五一　万十九　春まけてかく帰るとも秋風に紅葉の山を越さしめや
一五二　拾玉　くれなゐのふり出てそ鳴郭公紅葉の山にあらぬものゆへ
一五三　名寄　たちなすもみちの山の朝露になけはしほるゝ鹿や入らん
一五四　千五百　雨とふる紅葉の山を越行は身のしろ衣色かへてけり
一五五　夫木　又も見ん紅葉の山の木間より色に秋ある月も有けり
一五六　同　神無月紅葉の山に尋来て秋より外の秋をみるかな
一五七　同　長月の紅葉の山のゆゝしくはるゝ日影も色は染けり
一五八　同　長月のもみちの山の木枯にそめぬ松さへ色そ移ろふ
一五九　時雨つる紅葉の山は雲はれて夕日うつろふ嶺の松風

紅葉洞　未勘　類字

一六〇　玉葉　花衣かさき山に色かへてもみちのほしの月を詠めよ

百嶋　同

一六一　千首　なへてみな霞にけりなもゝ嶋の数うつみ行春の明ほの　為尹

藻塩浦　同　類字

一六二　続古　たゝす立もしほの浦の夕烟いかなる時か思ひけたれん　光俊

清和井　山城　藻塩

一六三　六帖　大原やせかの井の水を手に汲て鳥はなけともあそひてゆかむ　家持
一六四　名寄　大はらやせかゐの水を結ひあけてあくやとひし人はいつらは　伊勢
一六五　十五百　円居していかゐあそはん五月雨にせかゐの水も岩越にけり　顕昭
一六六　夫木　大原やせかの井の久草かきなてありやたゝまし涼みかてらに　好忠

芹生里　山城　藻塩

一六七　山家集　大原はせいうを雪の道にあけてとまもには人も通はさりけり　西行
一六八　拾玉　なかめやる人の思ひは大はらやせいうのおくの槙の炭かま　慈鎮
一六九　名寄　世をそむく門出はしけり大原やせいうの里の草の庵に　後徳大寺
一七〇　夫木　大原やせいうの里の月はゆゝしつか我身もむへ帰るらん　実家
一七一　同　おほはらや芹生の里の煙をはまたき霞の立かとそみる　季通

芹河　同　類字　当国四所二在之

一七二　後撰　さかの山ゆき絶にしせり川の千代の古道跡は有けり　行平
一七三　六百番　古のなかれをくるさかりかなその芹河の跡に任せて　季経

一七四一　同　御幸せし野への古道ふみ分て跡たえぬほ芹河の水　隆信

一七五一　夫木　身をつあは袖とぬるれ芹河の昔にあらぬけふの若なも　為顕

一七六一　同　せり川の野への古道たえぬとやたのれ跡とも春雨の空

芹河　同

一七七一　続古今　朝たにもよをこめてとれ芹川や竹田の早苗節立にけり　読人不知

一七八一　夫木　芹川や竹田のさなへさのみなと世のうきふしの数にとらん　中務のみこ

瀬見小河　同　類家

一七九一　六百番　石川やせゝの小河にいくしたてぬきしあふせは神に任つ　顕昭

一八〇一　千五百　いし河やせゝの小川の流にもあふせありやと御祓をそする　隆信

一八一一　名寄　雪ふりてせゝの小河をみ渡せは紅の竹は下もれにけり　慈鎮26オ

一八二一　名寄　御手洗の絶ぬにしるし石河や蟬の小河の清きなかれは　行家

一八三一　夫木　石川や蟬の小河の流てそ今もたえぬかものみたらし

禅林　山城

禅林寺にて時鳥を聞て

一八四一　新拾　忍ひねも昔なかりけり郭公やしつかなる林成らん　前律師永観

禅林寺にくゝまかりて山家秋晩といふこころをよめるに

一八五一　名寄　暮ゆけはあさちか原の虫の音も尾上の鹿も声たてつなり　頼家

背河　遠江　名寄歌枕ニ当国

一八六一　名寄　はら川やせかはの水の底清みすむ里人の心をそしる　雅経26ウ

右長明か記云かけ河の西にほそき川ありその川をへたてゝ西なるをはせ川といひ東をはら河といふなるも行とてとなん

石花海　駿河　仙覚抄云ヒウチ人富士山麓ノ海ニ得ル水海也ト云ヘリ　無名

勢奈河　同

建長五年毎日一首中東へ下るとて駿河の国にてよめる

一八八一　夫木　せな川の早瀬にみえて行水やいも恋渡る泪なるらん　為家

関屋里　下総　名寄歌枕ニ当国或ハ武州

一八九一　名寄　庵崎や角田河原に日は暮ぬせきやの里に宿やからまし　光俊

関河　近江　類家

一九〇一　唐木巻　打渡しまにゆるしなきせき河をみなれすみけん名こそ惜けれ　経家

一九一一　同　ふかこすすうへはみゆれと関河の下の通ひはたゆる物かは　後京極

一九二一　紅にせきの小川は成にけり音羽の山に紅葉散らし　家隆

一九三一　月清　しはしこそ小河の清水結つれ月はやとりぬ相坂の関　為家

一九四一　玉吟　たち帰りなを逢坂にいしま行関の小川の花のしら波

一九五一　夫木　関川の流の末の里つき水もたよりの早苗取なり

関寺　同　藻塩

一九六一　名寄　徒にゆきさもとむる関寺は六の道をゆるさるらん　衣笠27ウ

勢田長橋　海道中道　同

一九七 家集 栗津野のあはて帰れはせたの橋こて帰れと思ふ成へし
一九八 同 ひつきものたなす備ふる東路の勢田の長橋音もとろに
一九九 堀後 あしたつやはこさす駒に声立てせたの長橋引渡すせ
二〇〇 拾玉 栗津野の尾花か末にほのみえて霧立渡るせたの長橋
二〇一 詠藻 東路や日次のみつき絶しとて雪ふみ分るせたの長橋
二〇二 名寄 田上の山の木葉に時雨してせたの渡りに秋風そ吹
二〇三 同 田上やせたの渡りやなさしてよるとしなれは落ぬるをそする
二〇四 同 うも渡すせたの長橋霧こめて音はかりする駒ふみの板
二〇五 同 にほてるや矢はせの渡する船をいくそたひつせたの橋守
二〇六 同 引渡す勢田の中道空晴てくまなくみゆる望月の駒
二〇七 題草 夜をこめて朝たつ霧のひまくに絶〳〵みゆるせたの長橋
二〇八 夫木 相坂の関より越る秋霧は勢田の橋にや立渡るらん
二〇九 同 あふみの海せたの渡りかつく島たなかみ過てうちにとりつ
二一〇 同 うも渡すせたの長橋程もなく むと見ゆる野もの松原
二一一 同 朝ほらけ霧にまきる渡の上に霜置渡すせたの長橋
二一二 同 霧かくれたちのゝまきに引駒の音つくせ勢田の長橋
二一三 一字抄 忘るなよせたの中道打わかれ心空なる旅の別を

## 関清水　近江　類字

二一四 家集 よそにのみ聞て渡らぬ相坂の関の清水になかれぬる哉
二一五 拾玉 ひく駒のつめやひつらむ逢坂の関の清水の底そ濁れる
二一六 同 会坂の関の清水にうつりきて影にかけある望月の駒
二一七 同 あふ坂の関の清水と杉の葉と色もかはらて世に住や誰
二一八 同 猶もなを君に逢坂遠くより関の清水そ心涼しき
二一九 同 くろ〳〵ともとまて君に相坂の久しくすまん関の清水も

兼盛
同
慈鎮
俊成
中務
好忠
兼昌
顕季 28オ
定家
読人不知
同
為家
同
左大臣
俊信

二二〇 玉吟 会坂の関の清水は氷にてかけはへたてぬ望月の駒
二二一 同 あふ坂の関の清水に引とめてしはし水かへ望月の駒
二二二 十五夜逢坂や関のしめつの音朝山音にもしるし春の気色は
二二三 夫木 夏衣たちきる物もあふ坂の関の清水の寒くもある哉
二二四 同 かへる春ひまの駒とめ相坂の関のし水にしはし水かへ
二二五 草庵 相坂の関清水も見えぬまて猫木隠は花そふりしく
二二六 同 会坂の関清水の夕涼み秋やはこれに杉の下かけ

## 関山　同　藻塩

二二七 百十五 あか耳こそ関山越て爰にあとめ心は妹にとりにし物を
二二八 家集 むさし野の駒むかへにや関山のかひうち越てけふはきつらむ
二二九 同 むかへくるくもあるかな関山の駒引かへすかけはしるしも
二三〇 後十二 関の山嶺の杉村過行はあふみは猫やはるけかろ覧
二三一 名寄 相坂の関のと山の郭公あくる雲ねに初音鳴せ
二三二 懐中 君をとふ道の中には越かたき関の小山のなかるましかは

## 関藤河　美濃　類字

二三三 名寄 雪を分ておろす伊吹の山風に駒打なつむ関の藤河
二三四 方寸 頼こし関のふち川春きてもふかき霞に下むせひつゝ
二三五 同 藤河の渕瀬もしらす纒さして衣の袖をぬらしつる哉
二三六 新六 今そ思ふ関の藤川いかにしてくるしきせゝを我過にけん
二三七 夫木 春の嵐さそふ伊吹の山桜花をもちすな関の藤河
二三八 同 美濃の国不破の中山雪消てとくる氷の関の藤川
二三九 同 吹捨て風はいふきの山の端をさそひて出る関の藤河
二四〇 同 一かはへき契は君に結ひもきぬなかれまたゆな関の藤河
二四一 新葉 命あれは三代に仕ふる名もとめつ六十の今の関の藤川

家隆
同
雁信
読人不知
後徳大寺
頓阿
同
中臣朝臣 29オ
源順
能宣
忠房
中務
善光国
定家
好忠
為家
靴宗 29ウ
中務
康光
帝鑑井入道
冷泉入道

二四一二　同　仕へきてをさたしぬ身の名をたにも後までとめよ関の藤川　光資
二四三一　千首東路や心も懸て渡るかな浪の花よる関のふち河　為尹

関原　同　藻塩并歌枕当国　武越前

二四四一　名寄鳴かはす鶯の妻にしきられて行もやられぬ関か原哉　伸正

背山　紀伊　勅撰名所集当国　両部可決之

二四五一　万一　是や　此やまをにしては我恋る紀路に有てふ名にあふ妹の山　仲正
二四六一　万三　たくられのかけまくほしき妹か名を此せの山にかけはいかあらん　阿闍皇女　30オ
二四七一　同　よろしなへ我せの君の負きに此せの山を妹とはよはん　春日蔵首老
二四八一　同　槙の葉のしなふ女の山忍はれて我越行は木のは知けん　丹比真人
二四九一　同　七　妹にさそ我越行はせの山のいもに恋すてあるかともしさ　小田事
二五〇一　同　九　背の山に紅葉をしく神岡の山のもみちはけふか散覧　無名
二五一一　家集　朝きりあひ夕ゐる雲にとられて妹をとせる名におふ女の山　同
二五二一　名寄　宵のまに雪積るらん槙の葉にしなふ女の山風も音せぬ　俊頼
善通寺　讃岐　知家

さぬきの善通寺にて読侍ける

二五三一　新続　高野山その暁を契りきて爰にもおなし月やすむ覧　来歌

関浦　未勘

二五四一　夫木　郭公せきの浦わに鳴声を心にとめてけふも暮しつ　読人不知　30ウ

少御神　山城　藻塩当国　武豊前

二五五一　万七　おほなむちすくなみ神の作れりし妹せの山をみるそ嬉しき　人丸
二五六一　散木　月みれはすくなみ神そうらめしき西には山を作しさりせは　俊頼
二五七一　名寄　いさやまたうさの社はしし妻共やそなるらん少御の神　実正

炭竈里　同　類字

二五八一　新続　よそにてもさひしとはしる大原や烟をたゝぬ炭かまの里　土御門院
二五九一　同　炭竈の烟を里の名に立てよそにもしるき小野の山下　伊定　31オ

須原山　山城　藻塩

二六〇一　夫木　くしけすす恋をのみこそすはら山是より深くゐるとやさはは　思はイ

菅原伏見　宮　大和　類字

二六一一　六百番　初瀬山夕日はせとすか原やふしみの里は夕立の空　読人不知
二六二一　同　明方に夜は成ぬとや菅原の伏見の田井に鴫そ立ける　中宮権大夫
二六三一　家集　菅原や伏見の宮の跡古ていくらの冬の雪積るらん　季経
二六四一　方与　霞共花ともわかすすかはらやふしみの里の春の曙　定家
二六五一　拾玉　秋の夜を惜めて聞は菅原や伏見の里にやうつせ　同
二六六一　同　聞くのこゑたへぬ菅原やふしみの里の梓鹿の声　慈鎮
二六七一　同　初瀬山鐘の音さへすか原や伏見の夢はまた夜深きに　同
二六八一　同　菅原や伏見にむすふまろの夢を残すそ鹿の暁の声　同
二六九一　名寄　かき曇り時雨降けり菅原や伏見の外山色かはる迄　寂蓮　31ウ
二七〇一　夫木　我宿は菅原野へと成にけりいかにふしみへ人の行覧　和泉式部
二七一一　月清　菅原や伏見に結ふさゝ枕一夜の夢もしほりかねつゝ　後京極
二七二一　同　菅原やふしみの暮のさびしきにとり里とふ時鳥かな　同
二七三一　玉吟　すかはらや伏見の里のあれ枕ゆふかひもなき草の霜哉　家隆
二七四一　同　菅原やふしみもよその古郷にゝ絶はつる苔の通路　同

二七五 御集秋くる鐘のひゝきはすか原や伏見の里の冬の明ほの　後鳥羽
二七六 同　菅原や伏見の空に風寒て雪けに成ぬをはつせの山　同
二七七 同　すか原やふしみの秋の暮方にあれまくおしむ蛍かな　同
二七八 同　菅原や伏見の里の篠枕忍びし物を秋のゝくれ　同
二七九 同　菅原や伏見の里に来鳴なり我世へつる山郭公　同

## 菅田池　大和　類字添上郡

二八〇 堀百乙女子かすかたの池の蓮葉は心よけにも花咲にけり　鎌倉右大臣
二八一 同　置霜にぬひたる芦の枯ふしてすかたの池のあらはれにけり　同
二八二 六百番かゝりけるすかたの池のをしの声聞ては袖のぬれし数かは　同
二八三 新六いかにせんかはるすかたの池水の底清かしぬ心かひを　同
二八四 夫木しらせはや菅田の池の花かつみかつ見るかゝになみにしほるゝと　同
二八五 同　さほ姫のすかたの池の朝ぬかみ岸の柳にみたれてそほす　同
二八六 同　をしなへておなし菅田の池なれはひとつしらなる秋の雁金　同
二八七 同　あせにけるすかたの池の杜若いく昔をかへたてきぬ覧　同
二八八 同　ひるは出て菅田の池に影うつせ声をのみきく山時鳥　同
二八九 千五百いつかわかすかたの池と思ふにも枯葉の芦のあはれ成哉　師頼
二九〇 現六つれなくも菅田の池のまこも草かりの浮世に猫みたれつゝ　同
二九一 御集おいにけるすかたの池のうきぬなはくるしき世をそ思ひわつらふ　衆蓮

## 菅原里　同　類字

二九二 万廿　おきつ海の水底ふかく思ひつゝもひきならしし菅原の里　石川女郎
二九三 新拾　菅原や絶ぬる法の跡とめて又おとろかす鐘の音かな　良信
二九四 名寄すかしの里の萩原秋の雨にうつろはくるのおしき萩原　杉社

## 渚沙入江　摂津　類字

二九五 夫木いまつくる三輪のはふりか杉社過にしこゝはもはすともよし　鎌倉右大臣
二九六 万十一　あちの住すさの入江の荒磯か松我を待子しはたひとりのみ　丸
二九七 同十四　あちのすむすさの入江の隠沼のあないきつかしみすひきにして　無名
二九八 藻塩みさこゝるすさの入江にさす塩のかしや人に忘らゝ身そ　衆蓮
二九九 夫木　あやめかるすさの入江のこもりぬにおりたつ田子の袖もぬるし　後鳥羽
三〇〇 同　恋もみすさの入江に往恵のうきぬしつみぬあちきなのまや　家隆
三〇一 同　あちの住すさの入江の芦の葉に緑ましぬ冬はきにけり　為家

## 住吉　摂津　住吉里　神浦

三〇二 万一　霰降あられ松原住江のおとひ乙女とみれとあらぬかも　長皇子
三〇三 同三　住江の岸の松原遠つかみ我大君の御幸しところ　角麿
三〇四 同　しめゆひて我定めにし住江の浜小松は後も我まつ　余明軍
三〇五 同六　白浪の千重にきよする住江の岸のほにふにほひてゆかな　朝臣持
三〇六 同　馬の歩々押てとゝめも住吉の岸のほにふにほひてゆかん　豊継
三〇七 同七　くやしくも満ぬる塩か住江の岸の浦わにゆかましものを　無名
三〇八 同　めつらしきくを我家に住吉の岸のほにふを見んよしもかな　同
三〇九 同　馬なめてけふ我々つる住吉の岸の黄土を万代にゝん　同
三一〇 同　住吉に行てふ道にきりふゝし恋忘貝ことにし有けり　同
三一一 同　住吉の岸に家もかな沖に入にすゝ白波みつ思ほん　同
三一二 同　住江の興つ白波風ふけはきよする浜をみれはきよしも　同
三一三 同　住吉の岸の松かぬ打さらし寄来る波の音のさやけさ　同
三一四 同　いとまあらは拾ひにゆかん住江の岸にはるゝてふ恋忘貝　同
三一五 同十　住江の里をえしかは春花のましめつらしみ君あへるかも　同
三一六 同　住江の岸を田にはり時し稲のしかも苅まもあほ如君かも　同

三一七　同十一　住江の岸の浦巽にしき波の数にも妹もみるよしもがな　人丸
三一八　同　住江の浜によるてふうつせ貝みなきことにて我恋めやも　同
三一九　同十六　住江のをつめに出てうつくにもさか妻すしを鏡とみつも　御人
三二〇　同十九　住江にいつくはふりか神言と行とも来とも船は早けん　同
三二一　万廿　住江の浜松かねの下はへて我見るものゝ草な刈そね　
三二二　巻十　住吉のまつこそ物は悲しけれ神代の事をかけて思へば　
三二三　同　あらかりし波のまよひに住吉の神をはかけて忘やはする　
三二四　巻十　誰か又心をしりて住吉の神代をへたる松にこととう　
三二五　同　住江をいけるかひあるなきさとは年ふるあまもけふや知らん　
三二六　同　むかしこそまつ忘られぬ住吉の神のしるしをみるにつけても　
三二七　同　住江の松に夜ふかく置霜は神のかけたるゆふかつらかも　
三二八　家集　雁鳴てきくの花咲秋はあれと春の海へに住吉のはま　
三二九　同　住江のあさみつ塩に御祓して恋忘草つみて帰らむ　
三三〇　同　住江の年ふる松のよはひをはかへ〳〵も浪やかそふる　
三三一　同　名にふりてよに住江の神もなし恋しき人の影もみえねは　
三三二　同　わか行て花見るはかり住吉の岸の藤浪おりなつしそ　
三三三　同　たらちねもみなかしへて住吉の二葉の松の千世をこそみめ　
三三四　同　住吉の浦の玉もを結ひあけて渚の松の陰をこそみめ　
三三五　同　住吉の松より越す波の音も昔なかしに聞えけるかな　
三三六　同　年をへて我こそしたに住江の松をは人の人と聞つゝ　
三三七　同　心にもあしてうき世に住江の年ふる松そ見ぬはくるしき　
三三八　同　忘れ貝ひろふはかりに住吉のうらみて渡る程はへにけり　
三三九　同　忘れ貝ひろふはかりに住吉のうらみつへくそおもほゆる塩のひるまも今はなけれは　
三四〇　同　住吉のうらみつへくそおもほゆる塩のひるまも今はなけれは　
三四一　同　住吉の岸にすなる忘貝せめて恋しきけふそ求むる　同

三四二　同　住吉の岸の白波袖ひもて今はいふかひなくそ成ぬる　人丸
三四三　同　津の国のわか頼みし住吉もたよりなみこそまなく立けれ　同
三四四　堀亘　住吉の岸にかかれる藤の花かひ如色をいかにみせはや　忠見
三四五　堀亘　住吉の岸の小萩に打そへて波の花さへみつるけふ哉　隆源
三四六　同　後撰　浪の音にたくへてそきく住吉の汀にてふくこま笛の声　兼昌
三四七　山家集　波に宿る月を汀にゆりよせて鏡にかくる住吉の岸　西行
三四八　同　数かくる波にしつれの色柔て神さひ渡る住吉の松　同
三四九　拾玉　住吉の松の千年も君か代にいつれ久しと神にとはや　慈鎮
三五〇　同　住吉の松吹風も神さひてよ渡る月の影更けり　同
三五一　同　吹初し神代もいかに住吉の松の嵐の久しかれのそら　同
三五二　同　君か代に久しく匂へ住吉の松に契しもくさの花　同
三五三　詠藻　心なき心も猶そつきはつる月さへすめる住吉の浜　俊成
三五四　同　住吉の松も涼しく思ふらし君か千年の浦風　同
三五五　同　霞しく春の光に見渡せはもとせはしるし住吉の松　同
三五六　新六　住吉の浦のあま人いとまなみ岸田の早苗けふも取かな　為家

元保　元輔

## 吹田　摂津

前のおほきおほいまうちきみの吹田の家に御幸

有し時人々に十首歌めされしつねてに旅　同

吹田にて十首歌めされしつねてに旅　同

三五七　続後撰　川船のさしていつくかわかならぬ旅をほいはし宿と定めん　信明

吹田にて十首歌めされしつねてに旅　同

三五八　同　さてみれは千世もへぬへし高砂の松にむれゐる鶴の毛衣　元真

吹田にて十首歌講し侍しに恋を　同

三五九　続　古　我恋は瀬にゐる船の水を浅みつきて思ひのやるかたもなし　同

## 須磨　浦　関海　上野

人道前大納言　大炊大臣

三六〇 万六すまの蜑の塩焼きぬの馴なほか一日も君を忘て思はん　衣人
三六一 同十七 須磨人の海へ帝さしす焼塩のかしき恋とも我はするかも　大伴家持 36オ
三六二 須磨巻 松嶋のあまの笘屋もいかならんすまの浦しほたるる比　同
三六三 同 こりすまの浦のみるめのゆかしきも塩やく海士いかゝ思はん　同
三六四 同 うきめかるいせをあまを思ひやれも塩たるてゝすまの浦にて　慈鎮 37オ
三六五 同 蜑かつむけきの中に塩たれていつまてすまの浦に詠めん　同
三六六 同 心ありてひくてのつなのたゆたはゝ打すきましやすまの浦波　同
三六七 明石巻 すまの浦に心をよせし船人のやせてくたせる袖をみせはや　俊成
三六八 若菜巻 しつみしも忘如物をこりすまに身をなけつへき宿の藤波　同
三六九 同 身を投んふちもまことのふちならてかけしや更にこりすまのなみ　同
三七〇 同 あまのすをよそにきかやすまの浦にもしほたれしも誰ならなくに　同
三七一 堀百津の国のすまの浦風吹たひにしほれし芦の音のみそする　師頼
三七二 同 片敷のかた思ひしてすまの浦にたる藻塩のかしき比かな　顕季
三七三 同 いとゝしく都恋しき夕くれになみの関もるすまの浦風　俊頼 36ウ
三七四 同 後夜とともに藻塩垂つすまの蜑の心つかしや袖ぬるす覧　大進
三七五 家集 須磨の浦の浦漕舟のかちをたえまなへなき身を悲しかりける　小町
三七六 同 すまの蜑をしるへと思へはわたつ海の底のみるめはうたかひもなし　清正
三七七 同 すまの浦のもしほの烟春なれは空に霞の猶やたつらん　能宣
三七八 同 すまの浦にあさりする海士の大かたはかひあるよとそ思ふへしなる　兼盛
三七九 同 なにはへても塩のみやくすまの浦に絶如思ひを人しるらめや　信明
三八〇 同 すまの蜑のつゝみて底もかつかねほかき玉藻もみえぬせけり　元真
三八一 六百番 人しれぬ恨にあまる波の上をもさふる袖やすまの関守　寂蓮
三八二 同 人こふる我なかめよと思ひけりすまの関屋の在明の月　信定
三八三 家集 ほりまもや心のすまに関すへていかて我身の恋をもとめん　西行
三八四 拾玉 すまの蜑の焼藻の煙たえ〳〵に浦さびしくもみえ渡る哉　慈鎮

三八五 同 波の音や松の嵐に宿るらんなへて身にしむすまの夕暮　同
三八六 拾玉 すまの浦見渡す沖にぬる鴨はあの哀かうかふ成けり　慈鎮 37オ
三八七 同 ほりまもやすまの浦わの有明は月の関とそいふへかりける　同
三八八 同 これまては物の哀もしらさりつすまの関屋の旅ねうれしな　同
三八九 詠草 五月雨はすまの塩屋も空もてゝ烟はかりそ雲にそひぬる　俊成
三九〇 同 塩路より秋や立らん明方は声かはるなりすまの浦風　同
三九一 同 すまの関秋の日数をやとしとや浦ちをあて霧立にけり　同
三九二 名寄 播磨湯すまのはれまに見渡せは波は雲ゐの物にそ有ける　内大臣
三九三 同 すまの海釣せし人もけふよりや十年を松のえに渡るらん　恵慶
三九四 同 はる〳〵と木隠もなきすまの浦にみるめはゆき秋のよの月　仲正
三九五 同 桜花たせの若木ふり果てすまの関屋の跡埋むとん　定家
三九六 同 こりすまの籠江に生るうきぬなは浮身に物を思はすもかな　師頼
三九七 ［マヽ］ 鈴舟をまする音にやさくらんすまの上野に雉子啼也　顕昭 37ウ
三九八 月集 明石より浦つたひ行友なれやすまにもおなし月をみる哉　後鳥羽
三九九 同 五月雨は雲と波とを軒はにて煙もたえぬすまの浦人　同
四〇〇 玉吟 すまの浦に塩焼蜑の初塩の烟そ霧の色は染ける　家隆

## 鈴鹿河　山　伊勢

四〇一 万十二 すか川八十瀬渡て誰故か夜越に越ん妻もあしなくに　無名
四〇二 賢木巻 ふり捨てけふは行とも鈴鹿河やそせの波に袖はぬれしや　信明
四〇三 同 鈴鹿川八十瀬の波にぬれ〳〵すいせまて誰か思ひおこせん　元真
四〇四 家集 音に聞いせのすゝかゝ山河の早くより我立渡るかな　躬恒
四〇五 同 せにふれは人も越けりすゝか山音の今になるにや有覧　斎宮
四〇六 同 すゝか山しつのをたまき諸共にふるにはまさることなかりけり　
四〇七 同 鈴鹿山ふるのなか道君よりもきゝならすこそをくれかたけれ　

四〇八　一一　新集　すか山音に聞けん君よりも心のやみにまどひにしかな

四〇九　一一　堀百　わきかへり岩こす波の高ければ山ひこかせる鈴鹿川哉

四一〇　一一　拾玉　浮身かなふりぬる上に猶ふりぬすかの山の鈴虫の声

四一一　一一　同　鈴鹿河うき世の波に袖沾てふりすてつへき我身也けり

四一二　一一　名書　すか川やそせの波の春の色ほふりしく花の剣とそなれ

四一三　一一　同　永き代のためしにひかんすか河越ていつへき度会のしめ

四一四　一一　同　すか河たかをたてこせの蕃の塩たれ衣ふり捨てけん

四一五　一一　同　鈴鹿河八十瀬の滝の音なきは氷やとをて結ひそめけん

四一六　一一　同　すか山せをものあまの捨衣ほたれたりとやみる覧

四一七　一一　同　鈴鹿なる関の山の端高けれと越て過行秋の夜の月

四一八　一一　同　ふるまに跡絶ぬれはすか山雪こそ関のとさしなりけれ

四一九　一一　同　小萩原花にそ秋はとまりける関やは風の寄なのみして

四二〇　一一　月清　すか河浪と花との違すから八十瀬を分し春は忘れす

四二一　一一　同　鈴鹿山関の戸あくるしのめに猶道たゆる嶺のしら雪

四二二　一一　夫木　鈴鹿山たよりの風をしるへにてことつて渡るまつまのうら

四二三　一一　同　すか山関のはらなる花薄袖ふりはへて誰まねくらん

## 酢我嶋　伊勢　紀伊在同名

四二四　一一　山家集　すか嶋やたふしの石分かへて黒白ませよ浦の浜風

四二五　一一　同　かしす崎の浜のこいしと思ふかな白もましらぬすか嶋の黒

四二六　一一　同　あはせはやさきを鳥とこをうたはたふしすか嶋黒白の浜

## 濯河　同　藻塩

四二七　一一　名書　哀て必もなき代に名にしおはさ身をすすき川清く流よ

## 末腹野　参河　八雲御抄并藻塩当国

四二八　一一　百十　梓弓末のはら野に鷹狩する君かゆつるのたゆむと思へや　国信

四二九　一一　続後撰　長月の末の原野のはし紅葉時雨もあへす色付にけり　慈鎮

四三〇　一一　七帖抄　とにかくに御笠と申せ夏深き末の原野に日照雨降　同

四三一　一一　名書　沾つもしぬてみ狩の梓弓末の原野に霰ふる覧　定家

四三二　一一　夫木　契をきし末の原野の萩の露移ふ色に消かへりつ　家隆

四三三　一一　同　鶉鳴末の原野の萩か枝に秋の色ある夕附日かな　為家

四三四　一一　同　木枯の末のはら野の櫨紅葉かさそはれてくる秋哉　好忠

## 駿河海　駿河　類字

四三五　一一　百十四　するかの海おしへに生る浜つゝら今しを頼み母にたかひぬ　謙徳公

四三六　一一　新後拾　恋しぬしするかの海の浜つゝらくるよも波の袖ぬしす覧　輔親

四三七　一一　名書　霧かくれうたふ船人声はかりするかの海の興に出にけり　九条内大臣

四三八　一一　夫木　恋をのみ駿河の海の浜つゝらゆふ浪かけてほす方もなし　同

四三九　一一　新集　身をいかにするかの海の沖つ浪よるへなしとて立はなれなは　為家

## 角田河　河原　下総　類字

四四〇　一一　愚草　水茎の跡かきなかす角田河ことつてやとん人も問こす　定家

四四一　一一　玉吟　月影のさすや庵崎角田川越てまつらの山のかひより　家隆

四四二　一一　同　角田河忘れもすへき文方の月にありてふ鳥の名もうし　同

四四三　一一　月清　むかし思ふ角田河原に鳥もぬる我も昔のことはてやは　後京極

四四四　一一　名書　庵崎の角田河原に日は暮ぬせきやの里に宿やからまし　光俊

四四五　一一　堀百　すみた河ぬせきにかゝる白波の立帰るへき心社せね　顕寄

四四六　一一　拾玉　時しもあれ角田河原の都鳥昔の人の心しれとや　慈鎮

四四七　一一　同　角田河都の方を詠れは鳥もいつらは霞のみして　同

四四一八 同　旅の空秋の夜の月すみた川友こそなけれ都恋しも　同

四四一九 同　誰かゞ朝立やして眺むとん角田河原の初雪の空　同

四五〇 現六限なく遠く成行都かな角田河原の渡ししてけり　同

四五一 千五百むかし思ふ心もいとゞ角田川暮行程の渡り成けり　同

四五二 夫木こと問ん角田河原の郭公むかしの鳥の跡に鳴なり　同

四五三 新六都鳥あしはと思ひし角田川きゝ渡りてやゝをもはまし　同

四五四 同　都鳥みやこはしはし角田河すみてもなほ年のへぬれは　同

四五五 同　さりとても程やは近き角田河思はぬ方の都とりかな　同

四五六 夫木まつち山おろす嵐や寒かとん角田河原に千鳥鳴也　同

四五七 同　待乳山夕越ゆけは風寒みすみた河原に鵠鳴なり　同

四五八 同　夕されは誰忍へとて庵崎の角田河原に千鳥啼也　同

四五九 同　角田川むかしはきかす今こそは身も浮橋の有世成けり　同

四六〇 同　都鳥角田河原に船出しぬさして問へきくしなけれは　同

四六一 同　角田河あなかま冊の梶かゞせ夜渡る月をとゝむ斗に　同

四六二 御集　ことはん誰かは爰に角田河君にしおふ鳥はありやなしやと　同

四六三 草庵すみた川秋霧ふかし渡守ありやなしやとみえぬ斗に　同

## 須田渡　河原　下総　夫木二当国

四六四 夫木はる〳〵とすたの河原を朝ゆけは霞めり程や渡成とん　同

四六五 同　夕霧に須田の渡りは見えぬ共舟人まはふ声聞ゆ也　同

## 菅浦　近江　八雲御抄并仙覚抄ニ当国

四六六 万九高嶋のあとの湊を漕過て塩津菅浦今か漕とん　小舟

四六七 万代沖つ浪高嶋めくり漕過てはるかに成ぬ塩津菅浦　長方

四六八 千首心こそ猶ひかれぬれ朝ほらけ行てにみゆる塩津菅浦　為尹

## 椙森　近江　藻塩云杉森　同所也　杉村社

四六九 玉吟ふか緑椙は霞む杉の森なも雪しろし岡のへの里　家隆

四七〇 家集はふきつゝ今や都へ郭公過ぬてになく杉むらの森　道信

## 菅野　同　夫木二当国

四七一 夫木夏のおきのすか野になびく匂ひより秋に成行峯の松風　慈鎮

四七二 同　秋風に菅野の薄乱あひて旅行人の道たにもなし　匡房

## 菅荒野　信濃　類字

四七三 万十四信濃なるすかのあら野に時鳥鳴こゑきけは時過にけり　無名

四七四 六百番恋をゝみすかの荒野にはむ熊のをもられにける身社つらけれ　経家

四七五 同　く馴ぬ菅の荒野のあしくまはかりやのさきもしらすかほなる　知家

四七六 玉吟みな月のすかのあら野の杜鵑またはき咲す又帰りなけ　家隆

四七七 千五百郭公いつか忘れん東路やすかのあら野の夜半の一こゑ　保季

四七八 名寄しなかなるすかの荒野にはむ熊のおそろしきまで沾る袖哉　後頼

四七九 同　永日の菅のあら野に苅草のゆふてもたゆくとけぬ君哉　家隆

四八〇 夫木信濃野や菅の荒野にはむ駒はいはへそまさるてかふ人なみ　師光

四八一 同　夏ふかき菅の荒野にぬらひすゑつをはいかてしかにあふ覽　道経

四八二 同　しなかなるすかのあら野はうら枯て木曽の御坂は紅葉しけり　衣笠

四八三 同　年をへてすかのあらのゝかる萱にくしへ世まし恋のみたれを　拾玉内親王家伊勢　

## 諏訪　海湊渡　信濃　八雲御抄

四八四 すはの海冬の氷の通路や神かむすへるちかひ成とん　知家

四八五 明玉くまもなきをゝか光を氷にてすはの渡る秋の夜の月　信家

四八六一　名奇　月さゆるすはの湊のかぜも渡りくほりの上に氷をそふむ　慈鎮
四八七一　堀　百すはの海の氷の上のかよひちは神のわたりてとくる成けり　同
四八八一　山家集　春を待すはの渡りも有物をいつを限にすべきつらさそ　同
四八九一　拾玉世にふとてすはのと渡る旅人は心さへそとこほりぬれ　同
四九〇一　同　すはのとも音せて渡る嵐かな波は氷にたはこそあらめ　同
四九一一　同　諏訪の海に夏の氷をしく物は秋はつかしき夜半の月影　同
四九二一　玉吟　冬くれは氷のうへも玉ほこのすはの渡りはあすはよもなし　慈鎮
四九三一　千五百　すはの海や冬の名残の薄氷消すはありとも頼むへきかは　慈鎮
四九四一　同　すはの海の冬の里人我こそや氷を踏て世を渡るらん　同
四九五一　同　東なるすはのみ渡りいかなるんこほらぬしもそあやうかるへき　同
四九六一　同　とちそむる氷をいかにいとふらんあちむし渡るすはの氷海　同
四九七一　同　すはの海に氷すらしも夜もすがらきその麻衣寒渡る哉　西行
四九八一　同　月影のすはの湊にすむ夜はさまたきに結ふ氷成けり　清輔
四九九一　新集　あしたなるすはの祭の御狩人かも有けり神のちかひは　法印知海
五〇〇一　同　すはの海や氷をふみて渡る世も神し守らはあやうからめや　宗良親王

## 末松山　陸奥

五〇一一　家集　松かえに咲てかをれる藤浪を今は松山こすかとそみる　隆信
五〇二一　同　音に聞末の松山けふこそはうちくる波のこえ〳〵すみめ　顕仲
五〇三一　同　あしたつのむれゐる末の松山はいくそかさねの千年成覧　西行
五〇四一　家集　すゑの山昔よりまつ君をこそ浪高く共さしとそ思ふ　慈鎮
五〇五一　同　末の山まつ人をのみ頼みつ我をはなみに思ふ成へし　同
五〇六一　六百番　末の松まつよいたひ過ぬ覧山こす波を袖にかけて　同
五〇七一　山家集　松山の波は海にふかくなりて蓬ヶ池にいれよとそ思ふ　同
五〇八一　同　頼めをきし其いひことやあたに成し波こえぬへき末の松山　具親

42ウ

為家

五〇九一　拾玉　春くれは桜か枝に風散て花の浪こすすゑの松山　慈鎮
五一〇一　同　契てもひとりをくれてしほる袖の泪ゆかに末のまつ山　同
五一一一　同　白波の越てかへるとみえつるは雪に風吹すゑの松山　同
五一二一　同　哀にもくるしき海を思ふとて浪こす袖や末の松山　同
五一三一　詠藻　うかりけり昔の末の松山よ波こせとやは思ひ置けん　慈鎮
五一四一　明玉　浪こゆとぬる草木や思ふ覧夕立過る末のまつ山　同
五一五一　月清　しるやや君末の松山こす波に猶もこえたる袖のけしきを　家隆
五一六一　御集　浦ちかき末の松山雪ふれは冬よりうへを波やこゆ覧　具親

42ウ

五一七一　建保　やまひもや末の松山春の色に今こほ波は越けり　為家
五一八一　同　今はとてあたし心の春なれややよひの空も末の松山　同
五一九一　同　あつさ弓末の松山暮はたけふまて霞む波の夕暮　西行
五二〇一　同　春風に末の松山浪こさは比しも花の散かとやみん　清輔
五二一一　同　たちなれし霞の袖も波こえて暮行春の末の松山　法印知海
五二二一　同　おりしもあれ末の松山浪こえてつとき名かめに帰る雁金　宗良親王
五二三一　同　時わかす末の松山こす波の花を分ても帰るはかな　同
五二四一　同　月日さへいつこえぬらん霞こし波もやよひの末の松山　
五二五一　同　たち帰る波よりうへかすめるは末の松山春やこゆらん　貫之
五二六一　同　すゑの松山にかゝれる白雲の絶てわかるゝ春の色哉　能宣
五二七一　同　春の行末の松山吹風に霞まぬ波の花やちるらん　業盛

43オ

## 宿世山　出羽　薄塩ニ当国

五二八一　家集　すゑ世山なといなむやの関をしもへたてゝ人にねをなかすらん　信明
五二九一　万十七　すゑの海に朝ひらきして漕くれは長浜の浦に月照にけり　元真

## 珠洲海　御牧　能登　勅撰名所集ニ当国　珠洲郡

女房
西行
同
俊成女
内侍
俊頼
忠定
範宗
行能
家光

44オ

順徳院
行意
定家
家衡
家隆
俊頼
俊平
俊成
後京極

43ウ

後鳥羽
大伴家持

五三〇 同十八 すゝの海士の沖つみかみにいわたりてかつきとるといふあはび　同

五三一 堀後雲津よりすゝめくりするこし船の沖漕さかるほのゝにみゆ　仲実

五三二 懐中なつけたるすゝの御牧の駒ならはかひしふる野を忘さらむ

五三三 夫木 いくつそすゝのみさきをふり捨てこしなる里へいそく雁金　俊頼

五三四 同 哀にもこまかへりける心かないかなるすゝのみまき成らん　顕昭 読く不知

## 須蘇末山　越中　藻塩

五三五 長歌 すゝめかみのすそまの山のしふ谷のさきのありそに朝なきに

五三六 名寄 谷の戸はゆふしほさしてあま衣すそまの山に秋風そ吹　大伴家持

五三七 夫木 妻こひに鹿は鳴なりかゝる衣すそまの山の秋の夕暮　光俊

## 楫野　同　同

五三八 百十九 すゝきの野にさをとる雉子いちしろく音にしも鳴んこもり妻かも　無名

五三九 六百番御狩する人や聞こん杉の野にさをとる雉子声しきる也

## 菅山　同　八雲御抄

五四〇 百十七 心にはゆるふ事なくすかの山すかなくのみや恋渡りなん

五四一 名寄 春は猶面影もなき菅の山みしらくにあかぬ花の色かな

五四二 類聚 色さそふ木葉の里のかゝ錦あしくなたもそすかの山風

五四三 夫木 白糸のすかのは山の月まつと暮る夜かけて搗衣哉

## 須蓋鳥　出雲　夫木当国

五四四 夫木 すさのものみことをいのるもなしに越てそみましなみのやへ垣　和泉式部

五四五 歌合 勝間田やすかたの橋の朽ぬとも浮名は猶や世にとまる覧

## 姿橋　美作　名寄歌枕当国

## 酢蛾嶋　紀伊　八雲御抄伊勢ニ在同名

五四六 百十一 すか嶋のなつみの浦にあさる波のあひたもをきて我思はなくに　人丸

五四七 同 我を君心のまゝにすがしまのことをなつみかうらみてそ行　俊頼

## 菅生山　伊予　名寄歌枕当国

五四八 明玉 朝なきに漕出てみれは伊よ路よりすかふの山に雲のかゝれる　為頼

## 末野山　未勘

五四九 玉吟 時雨ゆく末野の山の木葉まて遠かの袖ぬるらん　家隆

五五〇 夫木 朝日さすする野の山の嶺つき空行くは雲もかさしす　同

## 須久毛岡　同　同

五五一 夫木 時しあれはすくもの岡の初蔵下にも光て知人はなし　衣笠

## 末尾里　同　同

五五二 夫木 山鳥の末おの里もしゝ伝ぬ竹の葉したり長き夜の霜　家隆

## 巣立山　嵩　小野　同

五五三 玉吟 鶯のすたちの嵩のほとゝきすみ山も出ぬ初音なるらん　家隆

五五四 同 鳴ぬなりはや里なれよ鶯の谷の巣立の山郭公　同

五五五 夫木 春くれはすたちの小野の鶯の声ならはしに今そ鳴なる　伊家

五五六 同 鶯の声またしふく聞ゆなり巣立の小野の春の曙　長方

五五七 同 春来ぬと今そ鳴なる待れこし巣立の小野の鶯の声　後一条入道

五五八 方寸子を思ふ巣立の小野に朝行はあかりもやらす雲雀鳴也　高蓮

五五九 千首 さてもその巣立の小野は春寒て谷にもれる鶯の声　為尹

## 須賀多野　未勘

五六〇　夫木　打なびくけしきをみれは女郎花すかたの野へはをれぬけり　読人不知

裾野杜　同

五六一　題林　夏ふかく成にけらしなから衣すそのゝ杜のかけの下草　為氏

鈴野　同

五六二　万葉集　雉子鳴すゝに君かもやすへてあそらますもむさ行てみん　俊成

薄野　同

五六三　名寄　すき野のみとりか末の初尾花なびくにつけて寄方もなし　土御門

杉谷　同

五六四　名寄　杉谷のふるすにやとる鶯の啼こそ春のしるし成けれ　法師仁



寛文七末稔正月十日
二條通玉屋町上村二良右衛門開板